

佐賀における幕末・明治期の解剖記録

青木 歳幸

佐賀大学地域学歴史文化研究センター

江戸時代の九州における解剖は、文政5年(1823)久留米藩での酒井元貞による男屍解剖や、弘化元年(1844)の島原藩での市川保定・佐一郎らによる男刑屍体解剖、安政6年(1859)の長崎でのポンペの男刑屍解剖などが知られている。しかし、佐賀藩領における江戸時代の解剖は知られていなかった。

このほど、佐賀藩医学学校好生館における幕末期の解剖事例が新たに見いだされたので紹介する。峯源次郎という蘭方医の『日録』(多久島澄子翻刻「(峯源次郎)日録」(青木歳幸編『西南諸藩の医学教育』、科研費報告書、2015年)に記載されている。

峯源次郎は、佐賀藩有田郷中里村作井手(現伊万里市二里町作井手)に、弘化元年(1844)8月15日、漢蘭折衷医峯静軒の子として生まれた。源次郎が12歳の安政2年(1855)に、静軒に日記の浄書を命ぜられたときから「日録」は始まっており、最初の2年間は、父の医療に従事したときの記録であるが、以後は源次郎の医療および日常活動に関する記録で、明治24年まで続いている。

源次郎は、父静軒に『傷寒論』など医学の基礎を学び、有田の儒学者谷口藍田に儒学を学び、安政7年(万延元年、1860)17歳で、佐賀城下の蘭方医大庭雪斎に西洋医学を学んだ。その年の7月から12月まで、長崎へも父とともにでかけ西洋医学の修行をした。文久元年(1861)から好生館に入学し、昼間は好生館で、夜は大庭雪斎塾で西洋医学を学ぶようになった。この時期に豚の解剖から人体解剖を経験している。

1. 万延2年=文久元年(1861)4月1日の解剖
朔晴、扶氏遺訓会讀社員解剖狗於五龍祠畔好生館教導職渋谷良次指
指南役相良寛哉二氏亦来会、夜往学
2. 万延2年4月9日、人体解剖
九日晴、観人体解剖
3. 慶応2年(1866)11月8日、豚の解剖
八日晴、於好生館解剖豚余担当消食器事了館賜酒
4. 慶応2年12月6日の婦人解剖
六日晴、為婦人屍体
5. 慶応3年10月25日、豚の解剖
廿五日晴、於好生館解剖豚余担当頭
6. 慶応4年閏4月15日、豚の解剖
(閏4月)十五日晴、於好生館解剖豚

慶応4年6月19日に昇級試験をうけ、昇進1等の成績を得た。同年、東京にでていた同藩出身医師永松東海から、上京の誘いがあったので、家族会議の結果、上京を決意した。

明治2年(1869)11月30日、好生館から医術開業免状を授与され、大学東校に入学するため東京へ出て、佐賀藩出身で文部省に務めていた相良知安の家に寄宿した。大学東校での授業はドイツ医学であったので、源次郎は明治4年にドイツ留学をめざし、ニューヨークまで出かけたが断念して帰国し、大学東校で再び学んだ。やがて明治5年段階では教師の役割も示すほどに上達した。

7. 明治3年3月4日には大病院(のちの東大医学部)での解剖
(3月)三日微雨後歛、朝為微恙臥、後下河辺来、午後與之俱從師觀櫻於上野山内遊觀、
如雲歌吹如湧実一大壯觀也、終過不忍池觀毘沙門堂之櫻
四日陰、為解剖休業
8. 明治5年9月27日、大学東校で牛の解剖
廿七日、解剖死牛示生徒
廿八日晴、日曜、松尾光徳来話
廿九日晴、午後三浦元碩来遂宿
(10月)三日晴、渋谷五等出仕免職、官特命高山余及秀島三人以病院及医学所之職務、盖
待新宮拙藏氏之歸札也

医師としての技量を高めた源次郎は、相良知安らの斡旋で、明治5年8月、開拓使の「札幌院詰」として就任し、好生館での恩師渋谷良次と明治6年1月21日、開拓史医学校の開校式にこぎつけ、教諭として活動を始めた。しかし、開拓使は経費削減の対象として同7年3月31日医学校の廃校を断行したため、源次郎はやむなく帰京した。相良知安を頼り、英学の知識を生かして佐賀藩出身の大隈重信の家庭医や書生的な役割をしながら、大蔵省に勤務することになった。15年後の明治24年に大蔵省を辞して帰郷し、郷里で医を開業した。「日録」は同年12月31日で終わっている。